

地藏（室町中期）等があり、単制石幢としては須玉町二日市場市神石幢（応永元年＝一三九四）が現存する。

なお、須玉町誌には、須玉町三輪神社の石幢（永享七年＝一四三五。町文化財）の造立者が、聖西蓮坊と一結衆（高野山の聖号の許可を受けた西蓮坊を中心とする信仰集団）と伝えられていることが記されている。

県庁庭園の石幢は同町地内寛林寺部にあったもので、三輪神社の石幢と全くその規模を同じくしていることから、造立者は同一の信仰集団ではないかとみられる。

このように、石幢が峡北地方にやや集中してみられる原因について考えてみると、義清―義光―信義―信光等、初期の武田氏が逸見筋に居館を構えていたため、金竜山信光寺（須玉町東向）を筆頭に数多くの名利・古刹があり、この地域が京都や鎌倉との仏教文化交流の中心的役割を果たしていたことが推測されるのである。

さらに、もう一つの推測として、棒道と石幢の関係について、峡北地方の民間に伝承されている話が意外に関わりがあるように思われる。

府中を抜けて須玉・長坂、そして信州の富士見・原村から仲仙道に直結するこの棒道の目的は、限られた時間の中で、できるだけ多くの兵員を所定の所に送り込むことにあった。

往時、棒道にはこのような石幢がいくつか建てられていたと言われ、地元では古くから「信玄燈籠」と呼ばれていた。このような名称で伝承されているのは、六地藏を刻んだ石幢の形式が石燈籠によく似ているためであろう。信玄燈籠は甲州の領内から国境を越え、大門峠以西の信州にまで建てられていたと言われている。

信玄燈籠の所在する所には必ず寺があって、その寺は信玄から厚い庇護を受けてい

たという。地元では、信玄燈籠は火急の派兵で武器だけを身にまとった兵士たちに、時に食糧を供給する兵站基地の目印として、また、合戦で傷ついた将兵が後送されてきて、始めて薬の手当を受けることのできる医療基地の目印として伝えられているのである。

燈籠の高さは二メートル余り、円柱状の幢身には蓮華の花片であろうか、請花と反花が上下に浮き彫りされて、円柱は下方に下がるにしたがって太さを増し、雄渾でかつ安定している。石幢は長い歳月、周囲の歴史を滲ませたかのように、黒く沈んだ沈静さを見せて、今も県庁の庭園にそそり立っている。

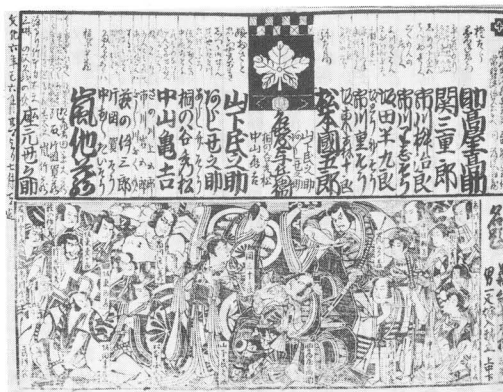
（調査協力員）

甲府の芸能と亀屋座

飯室 るり子

古くから人々は、神への祈りや願いを体の動きと音によって表現し神とのつながりを持った。そこから舞踊と音楽が生まれ、時代を経るに従い伎楽となり舞楽・能楽・

能狂言が生まれ、江戸時代に入っては人形浄瑠璃や歌舞伎となった。甲府における芸能の形成が見られるのは、江戸時代の人形浄瑠璃と歌舞伎の普及によるものではない



文化6年 亀屋座絵番付
(山梨県立図書館蔵 甲州文庫)

かと思われる。それ以前にも、田楽にその端を発する甲府市小瀬の天津司舞や黒平の能三番・竹日向の鳥刺し踊りなどがあるが、これらは人々の生活に密着した娯楽芸能とは言えず、主として五穀豊饒の祈念や小正月の際の行事として行われていたようである。

歌舞伎は、江戸時代から大正の頃にかけて
甲府の人々にとって親しみ深い芸能であつた。
『峠中古事記』によると「踊りは上二

条町ニ而元禄年中始る、ヤイト踊とて此躍
始は坊主小兵衛といふもの江戸役者也とて
初て参、甲府ニ而踊候由、一条町より踊を
出し、町々を廻りて御城番其外江参りはや
し候」とあるように元禄の頃、道化方役者
で知られる江戸の歌舞伎役者坊主小兵衛が、
甲府へやって来たのが始まりと伝えられて
いる。小兵衛は、お国歌舞伎のヤイト踊り
を舞いながら甲府の町々を通つて甲府城番
へ参上した。当時、芝居興行は寺社の境内
を利用して行われた。これは、本来芸能は
神や部族の繁栄を祈り平和や安全を心から
望む気持ちの現われである信仰の意味を持
ち、同時に寺社の勧進を目的に入場料を取
る興行形式が成り立ってきたためである。

興行は、一年を三季に分けて行なわれ、六月頃に江戸の大歌舞伎を招く土用興行、大歌舞伎の落伍者を中心に人寄せ興行を行う盆興行、十五夜の頃に江戸や大阪の義太夫を招いて行かう形浄瑠璃中心の秋興行などがあつた。これを三季芝居とか三季興行といふ。通常一つの興行は、一〇日以上

の長期に渡るものであつた。興行が恒例となるに従つて、芝居は人々の娯楽の中心となり、常連の一座が出て来るや常設の芝居

小屋もできるようになり、江戸役者の地方興行の意欲も高まっていったのである。

明和元年（一七六四）、西一条町（現在の若松町）の住人亀屋と兵衛は、甲州街道沿いの光沢寺境内に仮小屋を建て三芝芝居を願ひ出ている。「『甲府芝居繁昌記』に「『甲府町年寄の御用留に見ゆ、これぞ甲府芝居の根源か』とあるように、以来江戸大阪の名優が次々と来映している。二年後の明和三年には正式に三芝芝居の免許を受け、金手町（現在の城東二丁目）の教安寺境内に仮小屋ながら常設の劇場ができた。これが、甲府の劇場の始まり「亀屋座」である。

明和三年の正月興行、狂言は大序「式三番叟」、通し狂言「義経千本桜」で中村助五郎などの役者の興行であった。これを皮切りに三代目坂田藤十郎や名優七代目市川团十郎など江戸の名題役者が相次いで来映し、甲府の人々の関心を集めた。興行回数を重ねるに従って芝居好きの人々の目も洗練され、高い観賞眼を持つ芝居通になっていったと思われる。亀屋座は、多くの関心を集めながら不幸にして、明和七年の大火により焼失してしまうが、人々の芝居に対する興味は冷めず、役者の来映意欲も増し

ていった。明和八年七月、同所に新舞台を設けるが、享和三年四月の鳥羽屋火事で再び舞台を失ってしまう。しかし、時代が歌舞伎の全盛期を迎える文化年間、文化二年八月には亀屋与兵衛の住いのある西一条町の西一条通り（現在の若松町一丁目）に間口十一間・奥行二十間の大劇場が再建されている。移築のこけら落としには岩井半四郎らが出演したという。舞台は、寺社の境内から初めて外へ出て人々の生活の中に入ってきた。この頃には、興行回数も三季から五季と年に五回もの興行を行うようになり、江戸三座の名舞台に立つ名優の面々が亀屋座の番付に名を連ねていたことは、「甲州に亀屋座あり」と言わせる程の熱心な観客がいたことを物語っている。それは、江戸を懐かしむ甲府城勤番の武士や裕福な商人・農民等の存在が背景にあつてのことであろう。芝居と共に江戸の風俗や習慣なども伝わり、芝居通の多くなった甲府の舞台は、「江戸役者の給料のきめ場」と言われた程、役者も甲府の舞台には、力を入れ、地方での芸の見せ場であつたと思われる。亀屋座は、江戸の舞台へ立つ役者の登竜門的な存在であつたといえよう。

江戸歌舞伎一座は、地方興行を始めると甲州街道を通つてまず第一番に亀屋座で興行を行った。新しい出し物や新役者をこの舞台で試し、客の反応を見てその季節の興行内容を選び、長野・大阪・北陸・東北と地方興行を行ったようである。甲府の客の目が高かつたといわれるところであろう。この様に甲府に歌舞伎が流行する原因を作つた亀屋与兵衛という人物について見ると『甲斐国志』では、「三季芝居 戯場ナリ……亀屋与兵衛ト云者府中ノ土橋五ヶ所の修理ヲ役トシテ興行セン事ヲ願ヒ許容セラレル……」とある。また、山梨県立図書館若尾資料蔵『甲府町方取扱諸品取調帳』には「……右拾式ヶ所土橋の内、上一条町・下連雀町・魚町・金手町・元紺屋町、右五ヶ所は明和元申年西一条町与兵衛願上、芝居興行為冥加掛替修復被仰付」という記述がある様に市中の土橋修理を請け負うことなどを条件に人寄せ配の許可を得ていた。亀屋与兵衛は、土木工事を商いとしていた様であるが、なぜそれほど興行許可を欲しかつたのかを『甲府芝居繁昌記』に探ると「上一條町に生れ性活達、頗る俠氣に富んでゐた。家は、半商半農にて頗る有福だつ

た。演劇に対する趣味深く、為に概ね其の産を失つた程である」とある様に裕福な財産を惜しまず芝居に注ぎ込む程の入れ込み様であつた事が伺える。亀屋与兵衛の存在は、甲府に芝居の流行を呼ぶ一因となつた。甲府が幕府の直轄になり、江戸との往来が激しくなると江戸の文化が甲州街道をパイプに次々と入ってきたが、これには江戸の香を懐かしむ勤番士達の影響が多分にあつた。歌舞伎芝居はその中でも顕著なものである。山梨県立図書館に現在も残る亀屋座の九四枚の絵番付は、甲府の歌舞伎の隆盛を物語っている。

時代が江戸から明治に変わつても芝居熱は冷めず「若松座」と改名して人々に親しまれたが、大正から昭和へと変わる頃には芝居への関心も薄れていった。戦後は、映画やテレビの時代へと変わり、かつての江戸文化が華と開いたその面影をたずねることもむずかしい。

（市史編さん事務局）